

2020年度

テレビ長崎 番組審議会概要

第546回番組審議会

第546回番組審議会は、2020年4月8日 テレビ長崎で開催され、下記番組について審議した。

『KTN 開局 50 周年特番 伝えたいナガサキ～浦上は語る～』（テレビ長崎制作）

放送日時 2020年3月1日(日)14時00分～14時55分

出席委員（順不同・敬称略）

菊森 淳文

田崎 智博

柴田 守

石川 由香里

近久 宏志

大川 綾

山崎 健

以上 7名

欠席委員（順不同・敬称略）

内田 輝美

以上 1名

放送事業者側の出席は 9名

審議番組『伝えたいナガサキ～浦上は語る～』は、長崎市のカトリック浦上教会で原爆犠牲者に祈りを捧げ続ける信徒の被爆者を中心に、2019年11月のローマ教皇訪問前後の様子を描いた。番組ディレクターの佐藤有華は「なぜ祈るか、に向き合いたいとおよそ半年をかけて取材した。しかし、原爆被害の中心であり、迫害の地としてカトリック信者にとっても重要な意味を持つ『浦上』の描き方にとても悩んだ」と番組制作上の難しさを語った。

審議の概要（委員からの主な意見）

「伝えたいナガサキ～浦上は語る～」（2020年3月1日(日)放送）について

- ・1時間番組のメインはローマ教皇に見え、番組タイトルと番組内容にズレがあるように感じた。
- ・KTNですでに放送したローマ教皇長崎訪問に関する他の番組で見たことがある映像、シーンが多かった。既視感があり、視聴意欲がそがれた。もっと新しく取材した映像を使って制作して欲しかった。
- ・ローマ教皇は去年、訪問されていて、なぜ、このタイミング（翌年の3月放送）の番組か、疑問に思った。
- ・構成力が高く、ナレーションの言葉もとても良かった。
- ・永井隆博士が被爆後、原爆を「神の摂理」と唱え、その後「燔祭説（はんさい・せつ）」と呼ばれていることは初めて知った。もっと深く知りたかった。
- ・ローマ教皇の独占取材だけでなく、多くの主要なカトリック関係者や被爆者の取材をした上に、過去の映像も使用しており、50周年番組にふさわしい登場人物であった。
- ・被爆者について、カトリック信者や浦上居住者は全体の被害者の一部に過ぎず、番組では「被爆者」を限定して描いているように見えた。原爆は、信者を狙ったわけではないのという感じが残った。
- ・祈りを通じて記憶をつないでいく使命を見事に描き出せていた。
- ・原爆もキリシタン迫害も、どの立場から見るのかで描き方は変わる。被害者側の意識が強かったが、迫害した側などタブーにしてきた事象にも踏み込めればよかった。

また、新型コロナウイルスの感染拡大に関して、KTNの番組に限らずどのような放送・報道を必要とするのかについても議論された。

<主な意見>

- ・視聴者は迅速で正確な情報を求めている。
- ・東日本大震災など、これまでの災害や事件などの経験を生かして、報道のあり方を考えて欲しい。
- ・子どもたちもストレスを抱えているので、子ども向けの番組はありがたい。
- ・ニュースのほとんどがコロナ関連で、それ以外のニュース、希望が持てるようなものも取り上げて欲しい。
- ・関連情報をテレビで放送するだけでなく、自社のホームページにも情報を掲載しているのは良い。
- ・感染者の情報が詳細になることで、誹謗中傷も生まれるのでは。それがいかに卑劣かも伝えて、感染者を守るようにして欲しい。
- ・行政の対応に問題がないのかを取材した報道、身近な生活情報などとあわせ、「行動を変えましょ
う」という周知徹底も必要だ。

第547回番組審議会

第547回番組審議会は、新型コロナウイルス感染防止のため、委員全員が集まったの会議を開催せず、各委員がリポートを提出する「書面審議」とした。そして、各リポートを踏まえ、菊森委員長と番組審議会事務局長の徳川晃尚が5月20日に面談会議をして、審議番組についての意見をまとめた。

「KTN開局50周年特別番組 Love baby 家族のカタチ」

(2020年3月29日(日) 14時00分～14時55分放送)

出席(リポート提出)委員(順不同・敬称略)

菊森 淳文 田崎 智博 柴田 守 石川 由香里 近久 宏志 大川 綾 山崎 健 内田輝美
以上 8名

欠席(リポート未提出)委員(順不同・敬称略) なし

審議番組『Love baby 家族のカタチ』は、KTNの子育て応援事業(2017年度～)の関連番組で、①子育て先進国フィンランドの現状、②三重・和歌山など国内の子育て先進地の取り組みをテーマにした番組に続き、今回は3作目となった。ディレクターの川波美幸は、障害児の「療育」環境の改善を求める市議会陳情の取材をきっかけに、「Lovebaby」シリーズでの番組化を企画。「多くの人に現状を知ってほしい」と制作に取り組んだと説明している。

なお、番組の進行部分の収録は3月3日に新型コロナウイルス感染防止対策を十分にはかった上で行われた。

審議の概要(委員からの主な意見)

「Love baby 家族のカタチ」(2020年3月29日(日)放送)について

- ・「療育」は、核心を突いたテーマ選定であり、療育環境の現状紹介や問題提起ができていた。当事者だけでなく、社会全体で考える問題だと思った。
- ・県内の小中学校の特別支援学級数が、10年前と比べ2倍以上の「934」との報告に大変ショックを受けた。なぜそんなに増えたのか、背景について詳しく解説してほしい。
- ・ゲストの照英さんの善良な人柄がよく出ていた。一方で、コメントが抽象的であった。
- ・シリーズでは、出演者たちが「子育てをする親」であるが、社会全体の問題と考えるならそういう枕詞は不必要。「親だからわかる」としてしまいうことが、それ以外の人々を排除することにつながるのではないか。
- ・取材相手としっかり信頼関係をつくって、丁寧に取材を重ねている印象を受けた。
- ・障害を持つ少年について、両親が「生まれたときは障害を受け止められなかった」と振り返った言葉と現在の「(子どもを)誇りに思う」という言葉が対照的に響きあい、良い効果を上げていた。また、少年がとてもかわいらしく、日常生活のエピソードから、番組自体に優しさと深さが出た。
- ・「家族のカタチ」というタイトルは、「家族形態の多様性」を想起させた。療育の問題と「家族のカタチ」がどのようにつながるか、分からなかった。
- ・障害を持つ子どもと別居している家庭が紹介されたが、「壊れてしまった家族」という表現が気になった。プライバシーにも関わるとは思うが、何があったのか、もう少し説明が必要であった。
- ・長崎県全体の療育環境や、国内の先進地の取り組みも知りたかった
- ・今後も、Love Babyの1つとして、「家族のカタチ」を多角的に取り上げることを期待している。

また、書面審議では、新型コロナウイルス関連の報道・放送、キャンペーンについても尋ね、以下のような意見が出された。

- ・長崎港に修繕のため停泊していたクルーズ客船でのクラスター発生は、情報公開が遅く、報道と情報公開のあり方に大きな課題を投げかけた。
- ・報道番組では、わかりにくい事実関係を整理して説明するなどの工夫が必要。
- ・自粛と経済的な影響への支援等、バランスが難しく、報道しにくいところもあると推察する。
- ・身近な地域の感染が気になる。政府や行政の見解だけではなく、独自情報を入手するなどしてほしい。
- ・感染者数も大事だと思うが、例えば、長崎県の休業補償の申請が具体的にいつから始まるか、各市の対応がどのようになっているとか。行政のHPをこまめに見ている人は実は少ない。誰にでもわかりやすく、噛み砕いてそれら

の情報を伝えてほしいと思う。

・GW 後、長崎では、感染予防の警戒感・意識が弱まった印象がある。引き続き、警戒を促して

ほしい。

・コロナ関連以外にも、社会・時代が動いていることもしっかり取材・報道してほしい。

・多くの情報が出回り、振り回され、一喜一憂の毎日。テレビの役割って、何だろう？と感じている。

・アナウンサーが、外出を我慢しようと呼びかけるなど、KTN でもとても有効な取り組み

をしていて、マスコミの影響力を感じた。

・コロナが経済社会に及ぼす影響は、これから実際の現象となり、これまでとは違う経済社会とな

ると考えられる。「若者が希望を持てる、強く明るい経済社会をどう作るか」をみんなと考えられるような番組作りを進めてほしい。

・県民 1 人ひとりが新たな社会に適応できるように、その支えとなるような報道や番組作りをして

いてほしい。数年先を見据えた形での、展望的視点での報道・番組作りに期待する。

第 5 4 8 回番組審議会

第 548 回番組審議会は、2020 年 6 月 10 日 テレビ長崎で開催され、下記番組について審議した。

FNS ドキュメンタリー大賞エントリー作品『8 人のサッカー部』（テレビ長崎制作）

放送日時 2020 年 5 月 26 日(火)19 時 00 分～19 時 55 分

出席委員（順不同・敬称略）

菊森 淳文

田崎 智博

柴田 守

石川 由香里

近久 宏志

大川 綾

山崎 健

内田 輝美

以上 8名

欠席委員（順不同・敬称略）

なし

放送事業者側の出席は 11名

審議番組『8人のサッカー部』は、五島列島・宇久島にある宇久高校のサッカー部の2年間を追ったドキュメンタリー番組。部員不足のため試合に8人で挑む姿を、離島の少子高齢化や雇用不安などの現状を交えながら描いた。番組ディレクターの松永悠作は「（勝利が見込めないであろう）8人でのサッカーになぜ、打ち込めるのか、を表現できれば、と取材を進めた」と説明。また、新型コロナウイルスの感染拡大防止対策で離島への渡航ができなくなり、取材に制約があるなか、オンラインでのインタビューなど新しい取材手法も駆使したと述べた。

審議の概要（委員からの主な意見）

「8人のサッカー部」（2020年5月26日(火)放送）について

- ・全体がうまくまとめられたとてもいい番組で、笑顔になれる番組、率直に面白く、続きが見たいと思う番組だった。
- ・部員8人ながらも、「サッカーで勝ちに行く」「宇久を代表して戦っている」という強い思いが感じられた。
- ・高校生たちが海で遊ぶシーンでの笑顔とたくましさ。高校を卒業し、島から旅立つの船出のシーンで、送る側の後輩たちが船を追って次々と岸壁から海に飛び込む光景など、島ならではの気持ちが伝わり、感動的だった。
- ・離島が抱える問題が感じられ、これは日本の縮図だ、とも考えた。長崎や日本全体が抱える問題でもある。五島列島の位置や宇久の説明は、番組内のもうすこし早い時間帯であった方が良かったと思った。
- ・コロナで、高等学校総合体育大会（高総体）が中止になったことの、衝撃を知ることができた。
- ・コロナの影響で、さらに島の衰退が予測されるような後味が切なかった。その一方で、現地に行かずにオンラインを使ったインタビューは現実的でいい形態だと思う。
- ・前作の30分番組（ドキュメント九州「島を駆ける 8人のサッカー部」2019年9月7日放送）を視聴しているので、再放送のような印象を受けた。前に見た人も楽しめるよう、構成上の工夫がほしかった。

- ・あらかじめ番組の放送日が決まっているのは理解するが、放送局はコンテストに出展するために番組を作るのだろうか、彼らが引退するまでの状況を見たかった。
- ・取材者と高校生のコミュニケーションがうまく取れていた。定点観測のような手法であり、彼らが精悍な顔つきに変わっていく様子、おしゃれになっていく様子が見られた。また、（島で一緒に育ってきた）仲の良さや思いやりもよく表現されていた。

第549回番組審議会

第549回番組審議会は、2020年7月8日 テレビ長崎で開催され、下記番組について審議した。

『ヨジマル!』 2020年6月19日（金）15時48分～16時45分

『KTN Live News it!』ローカル部分

2020年6月17日（水）18時14分～18時49分

出席委員（順不同・敬称略）

田崎 智博

柴田 守

石川 由香里

近久 宏志

大川 綾

山崎 健

内田 輝美（リポート提出）

以上 7名

欠席委員（順不同・敬称略）

菊森 淳文

以上 1名

放送事業者側の出席は 12名

「ヨジマル！」は今春で7年目を迎えた夕方放送の情報番組。番組プロデューサーの安田朝香は「審議番組の放送日は『海と日本プロジェクト』のコーナーがあり、長崎市内でとれる岩ガキやハモといった夏の味覚を紹介した」と説明した。

続いて、「ヨジマル！」後に放送している「KTN Live News it!」について、報道制作局次長の赤木健一郎は「同じ時間帯にNHKと民放あわせて5局がニュースを放送する中、独自のカラーを出す必要がある。6月と7月は毎週水曜日に防災をテーマにした企画を放送していて、特に最近の大雨被害などの中、タイムリーな企画ができたのではないか」と話した。

審議の概要（委員からの主な意見）

『ヨジマル！』 2020年6月19日（金）15時48分～16時45分 について

- ・4月から新リポーターが加わったが、安定感とまとまりのある情報番組だと思う。出演者が楽しそうで、にぎやかな番組は元気が出ていいなあと思った。
- ・メインキャスターの吉井誠アナは人柄もよく、安定感がある。
- ・安定感の中で、独自性や新しさなどの工夫が必要なのではないか。
- ・気象予報士の解説がわかりやすく丁寧で、人当たりも柔らかい。好感が持てた。
- ・イタリア出身の出演者はもっと色々なコーナーに絡んでほしいし、普段知りえないイタリアの情報も紹介してほしい。
- ・ペーパークラフトを紹介する中継があったが、説明、中継の流れなど、全体的にギクシヤクしている印象を受けた。
- ・出演者の衣装を楽しみにしている。衣装提供を活用しながら今後も楽しませてほしい。
- ・「海と日本プロジェクト」は、海中映像など興味深く、丁寧に作られていた。ハモはどのように釣るのだろうなど、やや疑問が残った。
- ・ショッピングセンターからのお買い物情報で、チンドン屋さんが出てくるが、にぎやかでプロの芸だと感心した。楽しい出来になっていた。ただ、新型コロナウイルス感染防止のため「新しい生活様式」が呼びかけられているこの時期に「皆さん、お誘い合わせの上、お越してください」のコメントはどうなのか、と思う。

『KTN Live News it!』ローカル部分について

2020年6月17日（水）18時14分～18時49分

- ・防災企画について、危険箇所の検証など丁寧であり、有意義であった。タイムリーであり、独自色も出ていたと思う。
- ・災害を「仮想現実（VR/バーチャル・リアリティ）」でキャスターがスタジオで体験していたが、わかりにくく、リアルさが伝わらなかった。
- ・災害に関するニュースや企画は何度も何度も取り上げる必要があると思う。6月、7月に限らず、繰り返し放送してほしい。
- ・県内のニュースばかりだったが、ちょうど通常国会閉会日であり、地方から見る国政の場、を伝えてもよかったのでは。
- ・新幹線に関するニュースは、掘り下げ方が浅いと感じた。
- ・ニュースの映像や原稿の助詞の使い方について、曖昧な点が目についた。
- ・キャスター2人は話しぶりもよく、親近感がある。ただ、話すスピードがやや速いように感じる。
- ・「海上自衛隊の音楽隊員が高校生に吹奏楽を指導した」という企画特集は、わかりにくかった。原稿ももっと工夫する必要がある。

第550回番組審議会

第550回番組審議会は、2020年9月9日 テレビ長崎で開催され、下記番組について審議した。

『伝えたいナガサキ 被爆75年 平和祈念式典』 2020年8月9日（日）10時00分～11時45分

出席委員（順不同・敬称略）

菊森 淳文

田崎 智博

柴田 守

石川 由香里（リポート提出）

近久 宏志

大川 綾

相本倫子

内田 輝美

以上 8名

欠席委員（順不同・敬称略）

なし

放送事業者側の出席は 11名

審議番組は8月9日の平和祈念式典にあわせて放送する特別番組で、前半はこの1年の被爆地や世界の核情勢等を振り返る映像でまとめ、後半は式典の様子を生中継で伝えた。報道制作局次長の赤木健一郎は「今年は9日が日曜日であったため、放送時間を平日より15分長く確保することができた。ただし、被爆75年の節目の年だがコロナの影響で式典の規模等が縮小され、例年とは違う形となった」と説明。担当ディレクターで報道部の本田舞は「新型コロナウイルスの感染拡大で高齢の被爆者には取材を断られる等、制約が多い中、何を伝えるべきか苦悩して制作した」と述べた。

審議の概要（委員からの主な意見）

- ・番組構成・編集は工夫されており、好意的に見た。
- ・被爆75年で、被爆者に時間がないこと・コロナ禍・軍拡問題等「語るべき」テーマが過不足なく入っていて構成がうまかった。
- ・課題は十分、紹介されたが、これから平和に向けた活動をどのように起こしていくか、どうすれば平和を実現させることができるか、多角的に盛り込んでもらえればよかった。
- ・前・後半の間に中継で挟まれたアナウンサーと被爆者とのやり取りに言葉足らずな部分があったこともあって、番組全体に重複感と冗漫さを生んでしまったように感じた。
- ・前半部分で紹介された被爆者合唱団の被爆者がこれまでの苦悩を語り、新たに語り部として活動する姿に心を動かされた。
- ・被爆者の過去の映像も挿入され、折に触れ取材・記録していくことは地元メディアに課せられていると思った。また、取材相手との人間関係の構築や、取材の丁寧な蓄積がわかった。
- ・中継でアナウンサーがこれからの課題として「責任と義務 被爆100年へ」と述べたが、その言葉の意味を深く掘り下げてよかったのではないかと。
- ・コロナ禍で取材が制限されてはいるが、地元のテレビ局だからできることもあるだろう。今年の番組はさらっと通り越した、胸に迫るものを感じなかった。
- ・式典中継は粛々としていてよかった。

- ・ 式典進行について、アナウンサーの声が会場でのナレーションと重なる部分もあり、ナレーションはもっと少なくしてもよかった。
- ・ 安倍首相の挨拶について、広島のものとはほぼ同じで「長崎に向けた独自のメッセージがなかった」等のナレーションがあったが、それは式典中継では、言わなくてもよかったと思う。
- ・ 9日の式典中継はNHKと民放全局が放送しており、生中継である必要があるのか。きちんと番組を制作してもいいのではないか。被爆75年を機に生放送である意義を考え直してもいいのではないか。
- ・ 出席者のしぐさや表情等、式典の様子が伝わってきたことで映像の持つ力、怖さのようなものも見えた。

第551回番組審議会

第551回番組審議会は、2020年10月14日 テレビ長崎で開催され、下記番組について審議した。

『マルっと!』 2020年9月28日(月) 16時25分～19時00分

出席委員(順不同・敬称略)

菊森 淳文

田崎 智博

柴田 守

石川 由香里

近久 宏志

大川 綾

相本 倫子

内田 輝美(レポート提出)

以上 8名

欠席委員(順不同・敬称略)

なし

放送事業者側の出席は 12名

審議したのは、情報番組『ヨジマル!』と夕方のニュース『Live News it!』を新たに融合させたKTNの新番組。全国ニュースを数回挟みながら、県内の話題とニュースを、女性のメインMCと日替わりの男性アナウンサーが展開する構成になっている。演出担当の企画制作部専任部長の吉井誠は「ニュース・情報番組としてパワーアップさせた。他局より早くニュースを伝え、時間帯によりニュースの見せ方/切り口を変えていきたい」と説明。吉井とともに演出を担当する報道部の石橋亮一は「ニュースパートの新コーナー『長崎のミカタ』では、長崎の『味方』として、また、出来事の多面的な『見方』を示していきたい」と企画趣旨を話した。

審議の概要（委員からの主な意見）

- ・『マルっと!』はいいネーミングだと思う。
- ・情報番組とニュースの融合は相当難しいと思われる。各パートの充実、全国と地方がどう関連するか、違った角度の見方をどのように提示できるか、「長崎と全国の情報・ニュースが『ミルフィーユ状態』」である利点をどう生かすか、潜在的な視聴者をどのように取り込むか、が課題。
- ・全国ニュースから切り替わったローカルのスタジオで全国ニュース何の反応もないと、「つながり」が感じられず、全国ニュースとローカルニュースが「水と油」のようだ。
- ・番組中、同じニュースが3~4回出てくる。「さっきも見た」と興ざめする。くり返しはかまわないと思うが、視点を変えて伝える、濃淡をつけるといいのではないか。
- ・メインMCの琴岡アナウンサーの笑顔が良かった。一方、情報やニュースに肯定的な反応が多く、判で押したような印象も受けた。
- ・放送倫理上の問題があるように感じられるシーンがあり、制作者が何も感じていないのかと疑問に思った。
- ・ニュースという部分で、基本的なところでの力不足を感じた。ニュースのワイドショー化という流れに乗かって…ということだろうか。
- ・ゲストの必然性が感じられない。もっと専門分野のゲストのコメントを聞けばよかった。
- ・女性出演者を「ちゃん」で呼ぶのは「ヨジマル!での呼称の継続」とのことだが、気になった。
- ・番組内で、古典的な男女観・家族像が感じられる。
- ・まだ、コーナーの企画趣旨が分かりにくく、不満が残るところもあった。
- ・「母子避難所」についてのニュース企画は見ごたえがあり、有用な情報・課題を提供できていた。

- ・ニュース番組では、すごく悲しいニュースや批判をすることがあるが、情報番組にも対応できる「ふわふわ」としたセットでは適さないのではないか。

第552回番組審議会

第552回番組審議会は、2020年11月11日 テレビ長崎で開催され、下記番組について審議した。

『わがまま！気まま！旅気分 週末佐世保ツアー』2020年10月27日（火）19時00分
～19時54分

出席委員（順不同・敬称略）

菊森 淳文

田崎 智博

柴田 守

石川 由香里

近久 宏志

大川 綾

相本 倫子

内田 輝美

以上 8名

欠席委員（順不同・敬称略）

なし

放送事業者側の出席は 9 名

審議番組『わがまま！気まま！旅気分 週末佐世保ツアー』は、2000 年から BS フジで毎週土曜日の早朝に放送されていて、フジテレビ系列 28 局が持ち回りで制作を担当している。プロデューサーを務めた執行役員・編成局長の佐藤博之は「KTN でも年に 2, 3 本制作しており、番組は長崎の文化・物産・観光を全国で見てもらえる機会につながる」と説明した。ディレクターの山口史乃は番組制作について「全国と長崎県内での放送に向け、（長崎に関する情報・知識量が違うので）構成のバランスに悩んだが、九州近郊の若いママ層に佐世保に行きたいと旅行を計画してもらえるよう企画した」と話した。

審議の概要（委員からの主な意見）

- ・全体としてポップでかわいい感じ。インスタ（instagram；SNS ツールの一種）を意識した作りだった
- ・佐世保の王道中の王道コースを紹介していた。佐世保はハウステンボスとそれ以外の観光地がはっきり分かれるのが課題だったが、ツアークルーズバスをうまく使って 2 地点をドッキングする（つなぐ）努力が見られた
- ・ハウステンボスの新エリアはまさにインスタ向けで「映える（ばえる）」。若い女性が写真を撮ってみたいと思うだろう
- ・ハウステンボス内で紹介した店、佐世保バーガーの店など、なぜここを紹介したか、という根拠をもう少し知りたかった
- ・番組の全体的な趣旨は「ガイドブックに載っていない情報も目白押し」というものだが、本番組では県内の視聴者には目新しいものがほぼなく、ネットでもわかる情報だったのが残念
- ・番組の早い段階でハウステンボスのコロナ対策を映像で具体的に説明していて、対策をしっかりとっていると安心感につながった
- ・Go To キャンペーンで交流人口が増えることに不安を持つ視聴者がいることにも、より気を配ってほしい。タレントのスザンヌさんと本田アナが最初は「ソーシャル・ディスタンス」を取っていたのに、昼食時にチーズフォンデュを同じ鍋から食べたり、バスで並んで座っていたり、だんだん近づいていくのが気になった。社会が、距離が近いことに違和感を持つ時代になってきていて、番組でもそういう配慮が必要な時代になっている

- ・(感染対策など)「with コロナの旅」感が出ていたが、(ディレクターが説明したような)「子連れの若いママの家族旅」というより「若い女性の2人旅」という印象。子ども姿を想定したロケ地、シーンがなかった
- ・「女子旅」と見られることは、その一方で「女の子のステレオタイプ」を作り出してしまふ。「これで満足でしょう」というメッセージにならないよう注意が必要
- ・スザンヌさんは明るく、雰囲気も柔らかく、飾らない人柄で、非常によかった。言葉遣いが一部、気になったが、インスタのフォロワーも多く、発信力に期待できる
- ・県外の人が佐世保に来ることを想定するのなら、ハウステンボスと佐世保市中心部の距離、車で行けるのか、電車なのか…位置関係を地図で示したり、どうすれば効率的に回れるのかなどの情報が欲しい
- ・コロナ禍での観光・誘客の番組は、観光県に住む者としては心配。人が動くことをあんまり煽らないで、と思うところもある。しかし、ロケ地の店員やツアーバスガイドなどがこの厳しい状況下でも明るくいい表情で働いていたのが印象に残り、「みんな頑張っている」と励まされた
- ・佐世保の街を紹介するという内容でありながら、佐世保で暮らす人の姿が見えなかった
- ・この番組は「広告」なのかどうかを確認させていただきたいと思った。県内に住む人へ情報の新しさ
は感じなかった。人が動くことがどうなのかという時にこの番組を放送する是非をどう考えたのか疑問が残った

第553回番組審議会

第553回番組審議会は、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、委員全員が集まっていた会議は開催せず、各委員がレポートを提出する「書面審議」とした。そして、各レポートを踏まえ、菊森委員長と番組審議会事務局長の徳川晃尚が1月26日に面談会議をして、審議番組についての意見をまとめた。

『マルっと！！年末スペシャル～あしたを笑顔にするために～』

2020年12月25日(金) 16時25分～19時00分

出席(レポート提出)委員(順不同・敬称略)

菊森 淳文

田崎 智博
柴田 守
石川 由香里
近久 宏志
大川 綾
内田 輝美
相本 倫子
以上 8名

欠席委員（順不同・敬称略）

なし

審議の概要（委員からの主な意見）

- ・新型コロナに振り回されたこの1年の総括と来年への展望が、2時間によくまとめてられていた。1年を締めくくるのにふさわしい番組だった。
- ・商店街からの中継や「五輪出場内定選手」「伝統野菜で長崎雑煮を作る」等の企画・特集は、コロナ禍での厳しさなど良く表現されていて、経済的なキャンペーンや延期されたオリンピック・パラリンピック、郷土料理への関心につながった。
- ・感染症に関する特集は、長崎大学・泉川公一副学長の解説がわかりやすかった。内容も興味深く、実践的、かつ今後に希望が持てる話題が提供されていた。
- ・コロナ関連のニュースは、情報提供とあわせて、自治体の政策等問題点の指摘、地域や状況を勘案した情報の出し方にも工夫が必要だ。また、「クラスター」「オーバーシュート」など横文字が多いので、わかりやすい説明を付けるようにしてほしい。
- ・生放送であるが故の時間配分のまずさ（視聴者プレゼントの最後の1つが放送時間切れで紹介できなかった）や言い間違いが目についた。また、退職するアシスタントの女性が「主人の転勤で・・・」と言ったのが気になった。「夫」等言い換えた方がよかった。
- ・出演者の「仲のよさ」が感じられる一方で、各出演者が意図的でないとしても理想的な「家族モデル」を想起させてしまっているのではないか。家族のあり方が多様化する昨今なので、今後、多様性やSDGs（持続可能な開発目標）、放送の公共性なども踏まえながら、表現について考えてほしい。
- ・『マルっと！』は情報番組と報道番組の垣根をなくした新番組とのことだが、良くなったところが見いだせない。常に激しい時代の変化に敏感に対応し、多角的な視点で長崎を見つめなおし、常に問い、模索し続ける姿勢であってほしい。

第 5 5 4 回番組審議会

第 554 回番組審議会は、新型コロナウイルス感染拡大が続いていることから委員全員が集まったの会議は開催せず、1月に続いて各委員がリポートを提出する「書面審議」とした。そして、各リポートを踏まえ、菊森委員長と番組審議会事務局長の徳川晃尚が3月10日に面談会議をして、審議番組についての意見をまとめた。

『羽田美智子 こころの旅』

2021年1月23日（土）16時00分～16時55分

出席（リポート提出）委員（順不同・敬称略）

菊森 淳文
田崎 智博
柴田 守
石川 由香里
近久 宏志
大川 綾
内田 輝美
相本 倫子
以上 8名

欠席委員（順不同・敬称略）

なし

審議の概要（委員からの主な意見）

- ・見ていてじわじわと気持ちが温かくなった。コロナで大変な状況だけど、出演している皆さんが笑顔で、前を向いて、今できることに全力で取り組み、未来に向けて「夢」を語るのを見ている私たちにも勇気を与えた。
- ・このコロナに苦しみ、頑張っている方々の「こころ」に焦点を当て、それらをめぐる旅は新しくもあり、興味を惹かれるものがあった。全体的に静かで落ち着いていて、視聴者に「やさしさ」を伝えられる番組になっていた。
- ・コロナを縦軸に長崎の見どころを無理なく紹介していた上、県南の大型開発も全て網羅していて、構成・内容的に非常によかった。
- ・出演した女優の羽田美智子さん、吉井誠アナウンサーの雰囲気や柔らかい話し方が非常によく、番組タイトルの「こころの旅」にふさわしかった。吉井アナが長崎のことをうまく解説しており、アテンドとしての的確だった。
- ・出演者の人選が良かったし、お店も東彼杵やリモートで五島とつなぐなど充実していた。ただ、出てくるお店などはスポンサーだったのか、その境界があいまいで「広告的」要素が気になった。
- ・「昨年12月撮影」とスーパー表示があったのに、「今年」の放送に合わせようとしたやり取りや、ぶらりと訪ねたはずの店で店員が「マウスシールド」（口を覆う防護具）をすでに装着していたのは「仕込み」「小芝居」感を思わせた。また、「旅」をしているはずが、別の日の取材分が「同じ日のよう」に挿入・編集されているなど、時系列としてみると不自然に感じた。
- ・コロナ禍で「旅をしたい」「人と触れ合いたい」など自然な欲求を「旅番組で楽しんでもらう」というコンセプトの一方で、緊急事態宣言下の放送であること、「GoTo事業」との

関連、視聴者の旅心を煽ってしまわないかなど、負の側面も十分に考慮しなければならない。

- ・この番組に限らないが、ナレーションや進行役のセリフや字幕で、見る側の感動や感想を“誘導、するのは抵抗を感じる。直接的には言わないけれど、見る人には「きちんと伝わる …」それがプロの仕事ではないか。
- ・ドローン映像など、東彼杵の海や夕日など長崎の自然と街並みが非常に美しく表現されていた。また、羽田さんの「夕日、見てください。長崎が応援してくれていますよ」との言葉も印象深かった。
- ・「旅番組」は視聴者に「行きたい」と思わせることも大事で、番組内で紹介された店やアイテムについて、コロナが収束したら「行ってみたい！」との気持ちにさせるには情報量やインパクトが足りなかった。
- ・「旅先」として、長崎大学や大学病院が出てきたのは意外性があり、内容も面白かった。長崎大学では伝統的に伝染病の専門家が多く、コロナ対応でも活躍したという説明は興味深かった。
- ・長崎のテレビ局だからと言って「長崎県民に」「長崎の情報」だけを届けるのではなく、「『長崎』という地を活かしながら、県内だけでなく日本国内や海外の共感する方に向けてことばと映像で表現する」ことも今後、考えていいと思った。

また、あわせて書面審議では、新型コロナウイルス関連報道や番組に関しても意見を求めた。

- ・コロナウイルスの完全終息までは、警戒心を維持するような報道をしてほしい。
- ・視聴者の不安をあおるようなことはせずに、今まで通り事実を粛々と報道してほしい。また、視聴者が少しでも明るく元気になれるような番組作りを期待している。
- ・いたずらに不安をあおるのではなく未来志向で、また制度の不具合を追及するなら対処の方法や次善の策などを伝える努力をするべきだと思う。注意喚起は大切だが、長崎の現状を正確に伝え、過剰なパニックなどを避ける報道が大切だ。
- ・今後は、ポスト緊急事態宣言、ワクチン接種、五輪・パラ開催の是非など、国民、県民も何らかの判断（心の整理）を迫られる局面が雪崩的にやってくる。冷静な判断に資するよう、正しく、ニュートラルな報道が求められている。
- ・先が見通せない閉塞感は、人々にあきらめをもたらす。投げ出さない努力を応援する番組を作っていただきたい。
- ・コロナで経済的な影響を受け、支援を求めている人・企業と、支援できる人・企業をつなぐようなことができればいい。

第555回番組審議会

第555回番組審議会は、2020年3月10日、テレビ長崎で開催され、下記番組について審議した。

『75年目の悲願～奇跡の再会と核兵器禁止条約～』

2021年1月24日（日）14時00分～14時55分

出席委員（順不同・敬称略）

菊森 淳文

田崎 智博

柴田 守

石川 由香里

近久 宏志
大川 綾
内田 輝美
相本 倫子
以上 8名

欠席委員（順不同・敬称略）

なし

審議番組は2021年1月22日に核兵器禁止条約が発効したのにあわせ、広島で一緒に被爆した幼馴染2人が被爆から75年を経て奇跡的に再会した物語と、条約の批准・発効をめぐる被爆地の動きをまとめた。物語部分を担当したディレクターの大浦勝は「コロナで取材が非常に制約されたが、同じ被爆地ながら広島のことにはまだまだ知らないことがあると感じた。被爆後、色々な人生を過ごしてきたその思いを描きたかった」と制作意図を説明。条約関連の部分を担当したディレクターの本田舞は「発効当日の被爆者の希望に満ちた表情からこの条約がどれほど重要なのか伝えられたのではないか。ナレーションの言い回しや構成など、物語部分と条約の解説のような部分をうまくミックスできたか、など課題も残った」と振り返った。

審議の概要（委員からの主な意見）

- ・広島で被爆した2人が長崎で75年ぶりに再会。言葉にするとたった20文字足らずのできごとだが、「こんなことあるんだ」と驚く、まさに奇跡で、感動的だった。
- ・は一ちゃん（正木晴彦さん）と和美ちゃん（土田和美さん）の再会はドラマチックで、そのままドラマ化でも映画化でもできそうなストーリーだと思った。
- ・見ながら泣いてしまうことはないのだが、エンドのクレジットを見ながらじんわり涙するような番組だった。
- ・なぜ、奇跡の再会と核兵器禁止条約という2つの事柄を一緒に番組に制作したのかな、と疑問に思った。それぞれがしっくりかみ合わなかったという印象で、番組を分けた方がメッセージ性が高まったと思う。
- ・再会の物語は「民衆が被爆で経験してきたこと」をベースにしている、核兵器禁止条約に関しては「一つのムーブメント、社会運動」で。2つはまったく次元の違うものである、これを番組で合わせて矛盾なく、違和感なく扱うのは本来は難しいと思う。

- ・和美さんの手紙は、とても伝わってくるものがあり感動した。被爆地ではない場所に住む被爆者が、何を思って、何を語って、何を語らずにいるかを知れて良かった。
- ・正木さんのインタビューの言葉選びとか、表現がすごく独特で、味わい深かった。特に、番組最後に「宗教が違って、共通点を見つけて平和に向かうことが本当に大切だ」と話されたのが良かった。あの言葉で、最後に番組がすごく締まった。
- ・和美さんの明るさと、は一ちゃんが淡々と原爆のことを振り返るのが非常に良く、このコロナ禍に生きる私たちにもいろんなことを考えさせてくれるきっかけになった
- ・被爆者の高齢化の現実、(条約が発効し)今からが本当のスタートで、いかに後世に受け継いでいくかを考えるきっかけになった。
- ・核兵器禁止条約をはじめ原爆・核については非常に温度差がある。新型コロナは身近だと感じて能動的に行動しているのに対して、核兵器はどこか他人事。被爆地だけが盛り上がるのではなくて、被爆国としてどうして積極的になれるのか、改めて考えさせられた。
- ・75年前の原爆投下のエピソードは紙芝居仕立てで効果的であった。また、紙芝居はナレーションとは別の声による朗読で、柔らかな印象を受けた。
- ・核兵器禁止条約のパートで、長崎の被爆者で亡くなった山口仙二さんや谷口稜暉さんの姿を久しぶりに映像で見ることができ、小さい時に受けた平和教育を思い出した
- ・平和活動が被爆者から高校生たちに引き継がれていること、高校生たちがSNSのような新しいツールで情報発信をしているのが非常に良かった。
- ・核兵器禁止条約に関して、被爆地の長崎市長が条約への参加を呼び掛けるのに対して、佐世保市長は「理想だけでは」と答えている。被爆県でもこのように立場が分かれるのはなぜか、もう少し突っ込むとよかった。
- ・インタビューの字幕が、実際の発言よりもコンパクトにまとまっているところがあり、違和感があった。
- ・マスクをしている人のインタビューは聞き取りにくかった。
- ・平和活動に関する言葉遣い、例えば「恒例の9の日の座り込み」というがなぜ、「恒例」なのか。原爆の日のことを「あの日」と書くが、それだけで原爆投下や原爆資料館の展示を思い浮かべてもらおうとするのは、メディア側の「甘え」ではないか。知らない人たち、若い世代にもわかってもらえるように丁寧に説明するか考えることも必要だ。
- ・原爆について、(被爆地のメディアとして)報道しないといけないし、「またか」と思われるかもと)繰り返しを恐れてはいけない。

- ・このようないい番組をどうにかして残して行ってほしい。また、テレビでしか見ることができないのではなく、様々な媒体で見られるようにすれば次の世代にもつながるのではないか。
- ・夏だけでなく、冬に原爆の話を聞いたというのは大きかった。

また、放送局側から、2020年度上期（4月～9月）の「番組種別」について説明があった。